

平成27年度 彩の川研究会 研修会

懐古園（小諸城）・上田城

彩の川研究会会員 金塚史朗

はじめに

彩の川研究会では今年度「埼玉の城址と川」を研究テーマとして調査を進めています。

今年度の研究テーマをまとめるに当たり県外の城址と川の状況を視察し参考とするとともに自己研さんするため11月11日（水）に現地見学会を行いました。

当日は前日の雨も上がり好天に恵まれました。その喜びも東の間テレビをつけると早朝の大宮駅での事故により宇都宮線及び高崎線が全線不通との報。7時直前に運転再開するもダイヤが大幅に乱れ熊谷駅での集合時間に間に合うか大いに心配されましたがそれも杞憂に終わり一人の遅刻者もなく集まることができました。流石我ら「朝寝たられない症候群」の面々ばかりではありませんが退職しても危機管理能力の高さが証明されました。そのお陰で予定時間より10分も早く40名の会員の参加により一路視察地に向け出発しました。

視察箇所は、午前中に武田信玄が出城として利用した小諸城址と、昼食をはさんで午後には真田一族の居城で難攻不落と言われた上田城址を視察しました。

車中では篠塚会長から開会のあいさつがあり和やかな雰囲気の中で関越自動車道花園ICに向かいます。

信州路は野山一面カラマツなどの紅葉が真っ盛りで大変見応えのある車窓でした。

視察箇所に近づく車中では事務局長がバスガイド役を買って出て視察箇所について詳細な説明やらその地に因む歌の紹介があり車内一同驚嘆するとともに大いに盛り上がりました。流石一夜漬けならぬ二夜漬けの効果は絶大なり。到底真似はできません！

懐古園（小諸城）

上信越自動車道小諸ICを降り小諸城址のある市街地へと浅間山のすそ野をバスは下って行きます。一般的に城は外部から中の様子を隠すため標高の高い位置に築くのが通例ですが、この小諸城は城下町より城の標高が低く市街地から城内を見渡すことができ「穴城」とも「鍋蓋城」ともいう別称があるそうです。

小諸城址懐古園に着くと観光ボランティアの方が待機していきまして、通常であれば2時間程度のところを40分程度の駆け足ではありましたが丁寧な案内をしていただきました。



三の門前で観光ボランティアから説明を受ける



説明を聞きながら城内を進む

駐車場から間近なところにある三の門（国の重要文化財）は1615年に創建されましたが、1742年に発生した大洪水により流され1765年に再建されたと説明がありました。敵の攻撃でなく大洪水で消失した事実には衝撃を受けながらも再建後実に250年も現存していることに驚きを覚えました。

三の門を過ぎ二の丸跡、南丸跡、本丸跡、天守台と至る所に石垣が積み、特に当時から現存する苔むした石垣には歴史の重さを実感した次第です。

城郭の西側には急峻な斜面が千曲川に向かって続き自然の要塞となっており、また城内は千曲川に流れ込む支流（中沢川、松井川）の浸食によってほぼ東西方向に幾筋もの深い谷（紅葉谷）が刻まれ急峻な地形を空堀とし

て利用した特異な平山城でありました。唯一なだらかな陸地が続く東方向からの攻撃に備える必要があるため大手門、三の門や二の丸跡から本丸跡にかけて複雑な石垣が必要以上に組まれていたように思いました。



城址内に刻まれる幾筋もの紅葉谷



水の手展望台から見た千曲川

明治維新後に廃城処分の憂き目にありますが旧小諸藩士達の働き掛けにより懐古園という公園になり後に埼玉県にゆかりのある本多静六博士の設計により近代的な市民公園として生まれ変わったと説明がありました。

馬場周辺では春には桜の木に囲まれた名所となるそうで、秋には紅葉谷といわず城内の至る所でモミジなどの紅葉が楽しめます。この日はまさに紅葉真っ盛りの時期でまるで別世界に来た感がありました。視察する箇所が多くあつという間に出発時間を過ぎてしまいました。

昼食

昼口に信州へ来たなら新そばを食わずして帰れないということで、小諸城址懐古園から程近くの新そば蔵「丁子庵」で新そばを堪能しました。店内は水曜日にもかかわらず満席状態でしたが、団体客専用の建物もありゆったりとした雰囲気の中で食することができました。値段も比較的リーズナブルながら香り高くコシもあり言うことがありません。ごちそうさまでした！

上田城

昼食後は2度に亘る徳川の軍を撃退し天下にその名を轟かせた真田昌幸（真田幸村の父）が1583年（天正11年）に築城した上田城です。来年のNHK大河ドラマ「真田丸」のゆかりの地であり早々と街中にのぼり旗が上がり町興しの準備に余念がありません。

上信越自動車道小諸ICから二つ先の上田菅平ICで降り、上田盆地の北部に位置する平城の上田城址公園に1時30分に到着しましたが、既に予定より20分おしていました。ここでも二人の観光ボランティアの方が待機しており、案内していただきました。この上田城址公園も広く通常であれば2時間程度の視察時間が必要でしたが時間も押しており予定より短い40分程度の駆け足で案内していただきました。



上田城南櫓をバックに集合写真



観光ボランティアの熱い説明を聞く会員

南櫓をバックに全員写真を撮って後に一行は二手に分かれて出発し城址外周に沿ってけやき並木遊歩道（二の丸堀跡）を通り二の丸橋を渡り本丸へと向かいます。

上田城址公園の駐車場に降り立つとまず目に飛び込んでくるのが南櫓と西櫓であり、その基礎となっている石垣とともに所々で地肌がむき出しになった箇所（尼ヶ淵の崖）があります。当時城の南側には千曲川が流れ、浅間山の噴火泥流が厚く堆積したこの地を深く浸食してできた河岸段丘上に築城され天然の要塞となっている。土羽を近くで確認したところ風化して崩れた形跡がなく固化しており、地盤面近くの礫混じりの若干崩れ始めている地層が元々の河原の地層だと説明していただいた。

そこで観光ボランティアの方が機転を利かして、お城と川の関係に興味のある一行であるならと本丸よりは城内の北側にある文化財発掘中の箇所（児童遊園地内）へと誘ってくれる。まさにこの1週間位の間に埋め戻されてしまうとのことで真田三代の頃の百間堀の土手の遺構が発見された場所だと教えていただいた。

当時の城は南側に千曲川が流れ、西と東側に二の丸堀が北側には百間堀が二の丸を囲み、さらに二の丸の内側には本丸を囲むように内堀を擁し難攻不落のお城であったと説明がありました。堀には常に千曲川の支流である矢出沢川から水を引き込んでいたそうです。



上田城址駐車場一帯の尼ヶ淵の崖



真田三代の頃の城内の様子を熱弁

この城跡には樹齢100年といわれるけやき並木が有名で、この季節はけやきの紅葉に加え银杏の黄色、桜の葉の赤、モミジの深紅がかわり本当に燃え立つような風景に一同感嘆の声を上げていました。

終わりに

二つの城跡を視察し終え改めて築城する位置が小高い山の頂上から平地へ変遷してきた経緯や、城下町との関係などに思いを馳せながら、いずれも川が重要な役割を果たしてきたことを思い知らされました。

予定していた視察もすべて終了し、上田市内からの車中で喉の渇きを癒しながら帰路につきました。途中、宮田副会長から挨拶をいただき、予定していた時間ピッタリに熊谷駅に到着し盛況のうちに研修会を終えることができました。

また、現地を案内していただいたボランティアの皆様、そして下見までも行い充実した視察研修にいただいたバスガイド役の事務局長や事務局の方々には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。